

## 巻頭言

臨床心理学部 学部長 濱野清志

臨床心理学部研究報告第7集を発刊するにあたって、ひとことご挨拶を述べさせていただきます。本誌は、臨床心理学部および臨床心理学研究科に所属する教員と臨床心理学研究科の大学院生の日ごろの研究の発表の場としての機能を主としており、今号をみても本数は少ないながら多様な領域をカバーする論集となっています。すなわち、臨床心理学に関連した領域の研究報告にとどまらず、京都文教大学の臨床心理学部という場で展開している知の運動がどんな様相をもっているのか、臨床心理学部がいわばどんな顔つきをしているのか、この論集を通じて知っていただくことのできるものです。

日本の大学教育はいま非常に大きな曲がり角をむかえ、一部の研究拠点となる大学をのぞいて大多数の大学が大きくその方向性を研究から教育へ、シフトチェンジをはかろうとしています。京都文教大学はすでにその方向に沿って学生へのきめ細かな教育体制を整えていこうとすると同時に、さらには文部科学省の地<知>の拠点整備事業の対象校として選定されるなど、地域社会のさまざまな人的活動のネットワーク拠点としての役割を担おうとしています。

社会から一定の距離をとり、政治情勢や経済情勢にかかわりなく、学問を追及するのではなく、ともにこの社会に暮らす仲間として、社会に通用する学生を育てること、地域社会の活性化に直接的にかかわること、そういったことが京都文教大学の大きな使命となってきているわ

けです。このシフトは、自身の研究に専念することを中軸に置いている多くの大学教員にとって、予想以上に意識転換を強く求められる動きとなっているように思います。

しかしながら、こういった現代社会のニーズに応じつつ、一方で、やはり私たちはそれぞれが培ってきた専門性を自信をもって主張し、磨いていかねばなりません。さらにこのような状況では、単に専門家集団のなかだけで語り合っただけで自己満足するのではない、広く社会に開かれた高度の専門性を提示していくことも求められます。

それはしかし、真剣に取り組めば取り組むほど、とてつもないエネルギーと日々の努力が求められる作業となります。とりわけ、臨床心理学という学問についていえば、そもそもの性質上、その専門性が現実の社会と切り離されたものとなると学問として成立しない領域ですので、大学の現代状況のいかんにかかわらず、本来、社会に開かれた高度の専門性を目指してきました。

臨床心理学部にかかわる教育、大学院生が、自分たちの普段の研究をそれぞれの専門学会誌に投稿し世に問うだけではなく、こういった研究報告集を通じて一般に提示することで、よりいっそうこの大学の可能な社会的役割を自覚する契機になるのではないかと思う次第です。臨床心理学部の教員として本学部のさらなる発展と、新たな大学の在り方を構築する一歩へと、

本誌がその役割を果たしていくことができるよ　　ます。  
う、ともに力を合わせて進んでいきたいと思